

「人類はなぜ宇宙へ行くのか？」シンポジウム

磯部洋明（京都大学宇宙総合学研究ユニット）

今年の1月9、10日の両日、京大時計台記念館の百周年記念ホールにて「人類はなぜ宇宙へ行くのか」をテーマにしたシンポジウムが開催されました。本シンポジウムは京都大学宇宙総合学研究ユニット（宇宙ユニット）と京都精華大学の共催で、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、京大理学研究科附属天文台と共に、花山星空ネットワークにも後援を頂きました。当日は星空ネットワーク会員の方にも多くご参加頂き、実行委員を代表して改めてお礼申し上げます。

もともとこのシンポジウムの企画は、宇宙ユニットと京都精華大学が2009年に始めた「宇宙とアート」という連携プロジェクトの中で、京都国際マンガミュージアムの牧野圭一先生が「マンガ家と宇宙研究者で『宇宙人はいるのか』を議論したい」と発案されたのが始まりでした。その後、JAXAの方などとも相談しながら色々案を考えるうちに段々と話が大きくなり、とうとう「人類はなぜ宇宙に」という壮大なテーマで一般にもオープンにしたシンポジウムを開催することに決まったという次第です。

人類の宇宙進出は進歩と拡大を続けています。一般の市民が宇宙へ行くようになる日は遠くない未来にやってくるでしょう。数10年から数100年程度の未来には、地球環境の変動や資源の枯渇などのため、宇宙への進出と利用、そして移住が人類の生存のために必須になるかもしれません。さらに遠い未来を見通せば、氷河期の到来、隕石の衝突、大陸の変動など様々な激しい環境変動が地球と人類を待ち受けています。そして約50億年後には太陽が寿命を迎え、太陽系は生存不可能になります。

人類はいつまで、どうすれば生き延びられるのか。宇宙へ行くことは人間と社会のあり方をどう変えるのか。人類の未来について考えた時に喚起されるこれらの問いは、自然科学から人文社会科学まで幅広い分野にわたる総合的な研究の対象なるものです。宇宙ユニットはまさにそのような分野横断的な研究を推進するために、2008年に京大に新しくできた部局です。このような問題にたった一度のシンポジウムで答えがでるはずもないのですが、今後の継続的な研究活動の第一歩にするという位置づけで、今回のシンポジウムを企画しました。

視点を現在に引き戻すと、2009年には宇宙基本法が制定され、日本の宇宙利用政策は研究開発から利用重視にシフトしようとしています。1つの宇

☆「人類はなぜ宇宙へ行くのか？」シンポジウム・☆

宙ミッションには10年から数10年の年月を要するので、将来の宇宙開発を議論するには100年先の社会のあり方を見据える必要があるでしょう。そのような長期的視点の議論は、政策決定の場からある程度離れた場で、また宇宙開発を推進する立場であるJAXA主導ではなく、独立した立場で自由な議論のできる大学が主導して行われることが望ましいと思われます。宇宙ユニットのような研究者の集まりを持つ京大こそがその役割を果たすべきだと筆者は考えています。

シンポジウムでの講演、議論の内容をここで全て紹介することはとてもできませんが、以下に講演者の方々のお名前（敬称略）と講演タイトルを以下に列挙しますので、そこから講演内容のバラエティの豊かさを感じて頂ければと思います。

「太陽系の将来」柴田一成（京都大学）、「地球と人類の近未来・遠未来」丸山茂徳（東京工業大学）「人間は生物としてこれ以上進化するか？地球上に人間以外の知的生命は現れるか？」大野照文（京都大学）、「宇宙に文明をもとめて平林久（JAXA）」、「映像表現の宇宙進出」平野知映（京都精華大学）、「技術的側面から未来の宇宙探査と生活を想像してみる」山川宏（京都大学）、「日本人が宇宙へ移住する時」岡田浩樹（神戸大学）、「JAXA宇宙飛行士になって、宇宙にいこう！」柳川孝二（JAXA）、「宇宙進出と日本の未来」的川泰宣（JAXA）、「日本の将来計画への期待」松浦晋也（ノンフィクションライター）、「宇宙進出と性の問題」斎藤光（京都精華大学）、「マンガ・アニメと宇宙への憧れ」竹宮恵子（京都精華大学）、「宇宙問題への人文・社会科学からのアプローチ」木下富雄（国際高等研究所）、「人類が宇宙へ行くことの意義は何か？」山折哲雄（宗教学者）。

講演に使用された資料のうち、著作権等の問題のない一部のものは宇宙ユニットのホームページからダウンロードできますので、興味をお持ちの方はご覧下さい。（<http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/usss/symposium3.html>）。

「映像表現の宇宙進出」というタイトルで講演して下さった京都精華大学大学院生の平野知映さんは、「ひので」など太陽観測データを使った映像メディアアート作品"Hirano Cantabile"の上映もして下さいましたが、この作品はシンポジウムの後で全国公募のToyota Art Competition 2010で準大賞を受賞しました（大賞は該当者なし）。「Hirano Cantabile」はYoutubeでも見ることができます（<http://www.youtube.com/watch?v=7g2DRY8T9Yc&feature=channel>）。

☆「人類はなぜ宇宙へ行くのか？」シンポジウム☆

下記の写真は講演者の皆様に、前出の牧野先生、小山勝二・京大名誉教授（前宇宙ユニット長）を加えたパネラーの皆さんが壇上に並んだところです。当日は約 300 名の参加があり、各講演の後、パネルディスカッションの間も会場から多くの質問、コメントがあり、大変充実したシンポジウムとなりました。



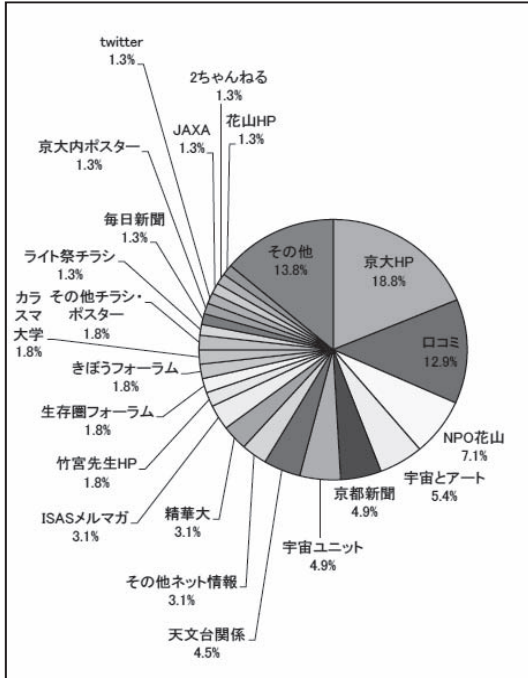
また会場ではシンポジウムに合わせて制作した「人類 50 億年双六」も配布しました。太陽系の形成に始まり、人類の歴史と未来予想、そして太陽の膨張により地球が住めなくなって他の星へ移住するまでを、人生ゲーム風の双六で表現したもので、京都精華大学マンガ学部非常勤講師（当時）のどうのよしのぶさんと筆者で製作したものです。人生ゲームではお金を稼ぎますが、この双六では科学技術と文明成熟度を稼いでゆきます。未知の病が流行ったときに科学技術が足りないと一回休み、火星政府が独立宣言した時は文明成熟度が足りないと宇宙戦争が勃発して一回休み、といった具合です。シンポジウムでの議論はマジメな学術研究としてやるわけですが、その成果はマンガやアートを通じて一般の方にも分かりやすく表現したい、というのが京都精華大学と共催で開催した本シンポジウムの一つのポイントでもありました。双六はおかげさまで大変好評で、新聞等にも取り上げて頂きました。裏表紙にその一部が載っていますが電子ファイルは宇宙ユニットのホームページからダウンロードできますので、ぜひ遊んでみて下さい(<http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/uss/et/sugoroku.html>)。

ところで、講演や議論の内容以外のところで筆者が驚いたのは、参加者のうち少なくとも数名以上の方が会場からツイッターを使ってリアルタイムで講演内容をつぶやき、それを元にインターネット上でリアルタイムの熱い議論が交わされていたことです。またある参加者の方が動画によるインターネット中継を申し出て下さり、そこにも数 10 名以上のアクセスがあったそうで、インターネットを通じて広い意味でシンポジウムに「参加」していた人は相当数にのぼっていたようです。会議、シンポジウムの新しい形態が始まりつつある、その一端を見たような気がしました。それまで存在は知っていたもののさして関心のなかったツイッターの威力を見せつけられた筆者も、これをきっかけに自分でもツイッターを使い始めてみま

☆「人類はなぜ宇宙へ行くのか？」シンポジウム☆

した。

インターネットの威力は広報にも現れました。図は参加者対象に「どこでシンポジウムのことを知りましたか？」というアンケートをとった結果です。



1位の「京大ホームページ」というのは、京大広報部、宇宙ユニット、附属天文台、それに星空ネットワークなどの複数のページが含まれている可能性があります。ホームページ以外ではココミと、星空ネットワークや「宇宙とアート」、JAXA 関係などのメルマガが中心で、ツイッターや2ちゃんねるといった答えも複数ありました。一方、チラシやポスターといった古典的な広報は、シンポジウムの開催を知ってもらった効果はあったと思いますが、なかなか集客には結びついていなかったようです。星空ネットワ

ークのイベントを含め、今後の広報戦略に参考になるかと思えます。

実はこのシンポジウムの準備と平行して、「普通の人」が宇宙へ進出する時代に起きうる問題点を、国際宇宙ステーションのきぼう日本実験棟の知見を生かしつつ、きぼうで行う実際のミッション提案も視野にいれながら検討する研究会の準備を進めてきました。シンポジウム後に JAXA への申請がめでたく認められ、きぼう利用フォーラムにおける「宇宙生存学研究会（代表：竹宮恵子・京都精華大教授）」という研究会が正式に発足しました。今後は1,2ヶ月に1回程度小規模な研究会を開催して、今回のシンポジウムで取り上げたような様々なテーマの検討を進め、その結果を元に一般にも公開した大規模なシンポジウムを2010年度内に再び開催したいと考えています。その際には星空ネットワークでもメーリングリスト等で情報を流して頂きますので、今後とも宇宙ユニット、そして宇宙生存学研究会の活動にどうぞご期待下さい。